

# 悲劇の戦争を二度と繰り返さぬよう

岸川光男

戦後四十八年を振り返って思い出すのは、聖戦の名のもとにすべての国民が、悲劇以外に表現できない多くの艱難（かんなん）辛苦の生活を体験したことです。

私も、内地教育もそこそこに、満州国境警備隊の一員として母国をあとにしました。生物すべてが凍りつく酷寒、零下三十度近くの白銀一色に覆われた広漠たる国境最前線。よく口ずさんだり銃に氷の花が咲く：の歌詞通り、凍りつく銃を手に昼夜の別なく警備に明け暮れました。越境衝突事件も多く緊張の連続です。また、冬将軍への対策も日課の一

つで、注意を怠り凍傷になった者も多かったです。また、警備の合間に行う陣地構築も、地下深くまで凍土と化しており、どのような工具も受け付けず、作業は遅々として進行しません。いつ終わるとも知れない作業の連続に戦友は皆が四苦八苦です。出るのはため息ばかり。時折、星空に浮かぶ月を眺めては故郷を思い出していました。

明日に向けて警備、作業に備えて兵器や資材の手入れなど、過酷以外の何ものでもない軍務を振り返れば、貴重な体験はいまだに残る無形の宝として懐かしくもあります。

最前線にも四季があり、短期間ながら夏の訪れを待ちかねたように一度に花が咲き乱れます。国境ならではの珍しい眺めは美しく、すさんだ気持を和らげてくれる風景です。しかし、足早に訪れる冬将軍の到来を思うと、心身ともに凍りつく思いでした。

戦況も南方面では、連合国軍の反撃で転進また転進の後退を余儀なくされてきました。国境守備隊にも転属者が続出。私の部隊も移動になり、当時の釜山で旅団を編成。

行き先も知らされることもなく、不安が募るなかで駆逐艦や航空機の護衛の下、輸送船団を組み出発。途中、幾度も敵潜水艦の魚雷攻撃に見舞われ、灯火管制下の薄暗い船内で救命具や浮具代用の竹筒に命を託し、皆無言で天命を待っていました。